

人は他人の気持ちをどのくらい 正確に読み取れるのか

— 会話体験の共有による比較 —

○難波修史¹・#道田奈々江²・#目良和也³・宮谷真人¹・中尾敬¹

(¹広島大学大学院教育学研究科・²マツダ株式会社・³広島市立大学情報科学研究科)

目的

日常生活において、対話相手がいったい何を考えているのかという推測を試みた経験は誰しもあるだろう。心理学においては、そうした他者の内的状態を正確に推量する能力を「共感正確性 (empathic accuracy: EA)」と呼んでいる (Ickes, 1997)。

EA は推量する相手である表出者との関係が親密なほど高くなることが指摘されている (Ickes, 2015)。これは表出者の内的状態を推量するのに用いる様々な情報が、関係が親密になるほど豊富になるためと考えられる。しかし、関係が親密になるほど EA が低くなることも同時に報告されている (Ickes, 2013)。他者との関係性というものは多くの要因が絡み合うため、関係性を構築する基本的な要素と EA との関連を検討する必要がある。

そこで本研究では、表出者と実際に対話を行った人物とそうでない人物を用いることで、体験の共有が EA にどのように影響するかを検討した。さらに従来の EA 研究で用いられてきた自由記述による回答ではなく、快次元、不快次元、活性次元の3つの評定値から一致度を観測することで知覚者がどういった情報は正しく推量できて、どういった情報の推量が困難であるかを検討した。

方法

参加者 広島大学の大学生6名が参加した (男性1名、女性5名、平均年齢20.17歳、標準偏差1.47)。

手続き 2名1ペアで参加者を分けた。実験室に呼ばれた参加者は個別に感情を喚起する映像を視聴し、それに関する対話を2分半行った。対話を行ったあと、各参加者は自身の内的状態の推定、対話相手の内的状態の推定、非対話相手の内的状態の推定をそれぞれ行った。

結果

データの解析にはプログラム言語である R および rstanarm パッケージを用いた。本人による評定を従属変数、対話相手もしくは非対話相手によ

る評定を説明変数、個人差と時系列を変量要因として加えた階層線型モデリングによるベイズ推定を行った。その結果を図1に示す。

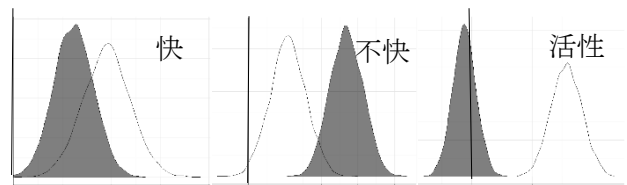


図1 モデルごとの説明変数に関する事後分布：白は対話相手による評定、黒は非対話相手による評定を示し、黒い直線は0を意味する。

快次元に関しては対話・非対話相手による評定ともに本人による評定と正の関連を示したが (95% CI) = [0.09, 0.29], [0.04, 0.20])、その傾向は対話相手の方が強かった。一方で不快次元に関しても、対話・非対話相手による評定がともに本人による評定と正の関連を示したが (95% CI = [0.01, 0.21], [0.18, 0.36])、その傾向は非対話相手の方が強かった。活性次元では、対話相手による評定は本人による評定と正の関連を示したが (95% CI = [0.21, 0.42])、非対話相手による評定は本人による評定と関連しなかった (95% CI = [-0.10, 0.05])。

考察

本研究の結果から、対話という体験を共有することによって相手の快感情や活性状態の予測がより正確になることが明らかとなった。これは、リアルタイムな体験の共有が、予測を正確にさせる手掛かりを引き出したと考えられる。今後は他者の内的状態の推定に関わる手掛かりをより詳しく検討していく必要がある。一方で、不快感情に関しては非対話相手の方が対話相手よりも予測が正確となった。データの挙動を視覚的に検証すると、この結果は実際に対話することで「相手は嫌な気持ちになったかもしれない」と過度に見積もることで予測に失敗しやすくなることが考えられる。今後、EA と個人差を検討することで本研究の結果をより詳細に考察できるであろう。